

ある。ナイフ形石器については横剥ぎの固有型ナイフ形石器との関連で捉えられるものがある。出土層位は同じであるものの、報告者同様、筆者も細石器文化期とナイフ形石器文化期の2時期に分けられると考えている。

#### (4) 指宿市小牧3A遺跡(第4図)

全面調査は昭和51年に実施されていたが、これまでは昭和54年度に刊行された『指宿史談』による概報のみであった。平成8年度に本報告書が刊行され、石器群の全容が明らかとなった。剥片尖頭器、両面加工尖頭器に加え、豊富な台形石器、ナイフ形石器等が出土している。出土層は黒茶色ローム(9層)で、層厚は20cmで良好な堆積状況を示すと報告されている。前回の論考で小型の台形石器については位置づけを留保したが、層堆積がしっかりしている他遺跡での出土事例を勘案すると、小型の台形石器、ナイフ形石器については時期が分離されると判断する。また、一部の三稜尖頭器についても時期的に分離できる可能性がある<sup>1)</sup>。そのため本遺跡の石器群はナイフ形石器文化期の中でも比較的長期間的な捉え方が妥当と思われる。位置づけに当たっては他遺跡の層位的事例をもとにそれぞれの石器群を当てはめていく作業が有効と思われる。

#### (5) 曾於郡福山町前原和田遺跡(第5図)

平成10年度、平成12年度に全面調査が実施され、平成13年度に報告書が刊行された。

XⅧ層～XⅡ層にかけてナイフ形石器文化期の遺物が出土している。報告者は、「XⅧ層を生活基盤としたナイフ形石器文化(台形石器・台形様石器・切出形ナイフ)が、XⅢ層に生活主体を持つナイフ形石器(切出形ナイフ・台形様石器・三稜ナイフ・三稜尖頭器)が存在する」と述べており、2つの時期にまとめられることを示している。また、このことはXⅥ・XⅢの各層からまとまった礫群を検出していることから裏付けられている。

XⅧ層を中心とする文化層は台形石器、ナイフ形石器が出土している。台形石器は剥片の横位利用、縦位利用が見られ、横位利用が多い。ナイフ形石器は斜刃のものが多い。

XⅢ層を中心とする包含層は、台形石器、ナイフ形石器、三稜尖頭器が出土している。ナイフ形石器は斜刃の切出形、三稜尖頭器に類似するもの<sup>2)</sup>とがあり、特に三稜尖頭器に類似するナイフ形石器は粘地遺跡のXⅢ層にも見られ、当石器の時期的な関係を考える上で興味深い。

なお、XⅧ層からの礫群は一定の配置構造をもっており、遺跡の構造を考える上でも非常に重要であると考えられる。

#### (6) 大口市小原野遺跡(第6図)

平成8年4月～9年1月まで全面調査が実施され、9年度に報告書が刊行された。大口市日東の黒曜石の露頭から直線約1km西側に位置する。旧石器時代ではナイフ形石器文化期と細石器文化期の2枚の包含層を有する。約2000㎡の面積から77000点もの遺物が出土しており、原産地遺跡的

様相を示している。遺物はナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器等が出土しており、特にナイフ形石器の出土点数は108点と群を抜いている。ナイフ形石器は基部加工のナイフや、横剥ぎ剥片を利用したナイフ形石器等に分けられる。前掲3器種で定型石器の70.5%を占めることを考えると、石器製作が集中的に行われた場所である可能性が高い。出土層位は、Ⅳb層～Ⅴb層にかけての50cmの範囲に均一に集中し、ナイフ形石器と細石器が同じような層から出土しており層位的分離は難しいと報告されている。筆者はこれまでの調査の層位的事例から考えて、細石器文化期とナイフ形石器文化期の概ね2時期に分けられるものと考えている。

#### (7) 日置郡松元町西ノ原B遺跡(第8図)

本章1で紹介した宮ヶ迫遺跡と同じ台地上に位置し、仁田尾遺跡の隣接地である。平成6年度に全面調査が実施され、平成13年度に報告書が刊行された。薩摩火山灰層(Ⅵ層)の下位(Ⅶ層)より細石器と小型の台形石器、ナイフ形石器、三稜尖頭器が出土している。ブロックはA～Mまでの13か所検出されている。点数が少ないことも併せて各器種間でのレベル差は読めない。

#### (8) 曾於郡財部町耳取遺跡・桐木遺跡(第10、11図)

平成10年～11年度に全面調査が実施され、本報告はまだなされていない。ここでは平成12年の『考古学ジャーナル』他に速報が掲載されている(長野眞一 2000, 2001)ので、それをもとに記述を行う。同時に国道を隔てた桐木遺跡も速報がなされており、本稿では立地的に連続していることと基本土層も同じであることから同一石器群として合わせて検討を行うことにする。

ナイフ形石器文化期の遺物の出土層位はXⅧ層、XⅥ層、XⅢ層で、そのうちXⅧ層とXⅢ層について速報がなされている。

XⅧ層からは剥片尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器等が出土しており、剥片尖頭器が主体を占める。礫群も合計85基検出されており、遺物と礫群との相関関係が指摘されている。また、礫群の重複がないことから時期的に極めて純粋な様相を呈している可能性が高いと考えられる。

XⅢ層からは小型の台形石器とナイフ形石器が大量に出土している。台形石器については「百花台型を想起させる形態である」と報告がなされている。ブロックが環状に検出されており、互いのブロックの関連性が指摘されており、この石器組成についても時期的な同一性が高いと考えられる。なお、上層のXⅡ層からは細石器が検出されている。

### 3 地域ごとの層位検討

#### (1) テフラからの比較

ここで、県内編年の裏付けをより確実にするため、県内でも比較的層位の堆積の良好な大隅半島北部の台地の標準